

令和元年6月17日現在

機関番号：33107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04100

研究課題名(和文)メッセージフレーミング効果の世代間伝達：メッセージの送り手と受け手の親子関係

研究課題名(英文) Intergenerational transmission of message framing: Parent-child relationship of message sender/receiver

研究代表者

佐々木 宏之 (Sasaki, Hiroyuki)

新潟国際情報大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：80389949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：メッセージの言語表現を変えるだけで、動機づけや意思決定が変わってしまう現象はフレーミング効果と呼ばれている。本研究は、メッセージの送り手と受け手としての親子関係に着目し、養育者の説得的メッセージのフレーミング方略と子どもの意思決定のフレーミング効果の関係を検証した。その目的達成に向けて、養育者におけるフレーミング効果が、子どもへの説得的メッセージのフレーミング方略を介して、子どもにおけるフレーミング効果に世代間伝達するという作業仮説を導入し、学生とその保護者、幼児とその保護者を対象にした調査からフレーミングを多角的に検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第一の意義は、これまで認知心理学や行動経済学の分野で主に行われてきたフレーミング研究を発達・教育心理学の分野に適用した点である。発達段階の異なる研究対象に対して独自のアプローチで調査・分析を行ったため、フレーミング効果についての多角的な解明につながった。第二の意義は、メッセージの送り手と受け手という異なる視点から様々な文脈のフレーミング効果を確認した点である。本研究により、親のフレーミングと子どものフレーミングの関係性や多様な文脈のフレーミング効果の比較などユニークな知見を得ることができた。その成果はこれまでのフレーミング研究を深化発展させ、子どもの教育・保育への実践的な提言を導いた。

研究成果の概要(英文)：Framing describes a phenomenon whereby changes in the wording of a message, without a change in the implied outcome, produce variations in individual's judgment and behavior. This study focused on the parent-child relationship of message sender/receiver and investigated the framing strategy of parental persuasive messages to children and the message framing effects on children. It was hypothesized that the message framing effects on parents are transmitted to those effects on children through the framing strategy of parental persuasive messages to children. To test this hypothesis, the study conducted surveys, observations, and experiments with adolescents, preschool children, and their parents.

研究分野：教育心理学、認知心理学

キーワード：メッセージ フレーミング効果 言葉がけ 自己制御 幼児 養育者 保育者

1. 研究開始当初の背景

保育者は状況に応じた言葉がけによって意欲を引き出ししたり、行動を制止したりして、子どもの自己制御機能の発達を促す。自己制御に関する理論 (Higgins, 1997) によると、自己制御にはポジティブな結果を目指す志向性 (促進焦点) とネガティブな結果の回避を目指す志向性 (予防焦点) があり、これら 2 つの自己制御機能は幼児期の養育者との関わりの中で育まれる。そこで、子どもへの言葉がけを 2 つの自己制御に対応づけて整理すると、「ご飯を食べて大きくなる」ことを目指す言葉がけは促進焦点に分類でき、「虫歯を予防する」ことを目指す言葉がけは予防焦点に分類できる。Sasaki & Hayashi (2015) は、メッセージの表現の仕方では説得力が変わるというフレーミング現象に着目し、幼児の親が促進焦点場面ではポジティブな結果 (元気になるよ) の提示を好み、予防焦点場面ではネガティブな結果 (バイ菌が取れないよ) の提示を選択することを見出した (この関係性を制御適合と呼ぶ)。

2. 研究の目的

(1) 幼児への言葉がけに見られる制御焦点に関するこれまでの研究は質問紙法により得られたものであるため、実際の育児中・保育中の発話でも同様の結果が得られるか確かめる必要がある。そこで、保育学生と保育者が保育場面の言葉がけで制御適合に合致したフレーミング方略を採るか、そして、保育者を目指して就学中の学生と保育の専門性を有する保育者には言葉がけにどのような違いが見られるのか、について検討した。

また、制御焦点に関するものに限らず、子どもの行動を引き出すために行っている多様な言葉がけを分類し、保育士の言葉がけの工夫の実際を検討した。

(2) 制御焦点機能が親子の相互作用を通じて世代間で伝達するという仮説のもと、子どもの制御焦点機能を育む親自身の制御焦点傾向が子育て中の行動や判断に現れると予想した。そこで、子育てにまつわる意思決定に制御適合の関係性が見出せるか、そしてそこに養育者の養育スタイルの影響が見られるか検討した。

(3) 制御焦点機能が親子の相互作用を通じて世代間で伝達するという仮説のもと、親の養育スタイルが、親のフレーミング方略の選好を媒介して、子どもの制御焦点傾向に与える影響を検討した。

(4) これまでの研究は養育者や学生を対象とした調査であった。次に幼児を対象として言葉がけと制御焦点機能の関係を捉える実験課題を開発するため、子どものおもちゃを用いて予備的な調査を行った。ポジティブな結果の追求とネガティブな結果の回避が関与するおもちゃを選定し、おもちゃ課題の成績と制御焦点との制御適合を検討した。

3. 研究の方法

(1) 新潟中央短期大学学生 7 名および新潟県の保育園に勤務する保育士 11 名が着るエプロンにピンマイクを装着し、約 2 時間の発話を IC レコーダーで録音した。子どもの行動を促す、あるいは制止する場面の言葉がけの中から、ポジティブ表現とネガティブ表現の両表現が可能な発話を抽出し、各発話についてフレーミング方略 (ポジティブ表現・ネガティブ表現) と自己制御焦点 (促進焦点・予防焦点) をコード化した。

さらに、制御適合以外の観点について、子どもの行動を促す、あるいは制止する言葉がけを抽出し、保育士の言葉がけを、指示、確認、勧誘、提案、許可、代弁、ポジティブ焦点、ネガティブ焦点、の 8 通りのカテゴリーに分類した。以上の分類を行った後、それぞれの言葉がけが求める自己制御行動が促進焦点・予防焦点のいずれかに該当するか、あるいは Do 状況・Don't 状況のいずれかに該当するか検討した。

(2) 保育所・幼稚園に通う幼児の保護者 293 名を対象に、子育てに関する 3 つのメッセージに対して、メッセージがどの程度信じられるか、メッセージに従う方がいいと思うかを 7 段階の尺度で測定した。また、養育スタイル尺度について 7 段階の尺度で測定した。要因計画は、メッセージの制御焦点 (促進焦点 / 予防焦点) × メッセージのフレーミング (ポジティブ / ネガティブ) の 2 要因 2 水準被験者間計画であった。

(3) 短期大学生 150 名を対象に、養育スタイル尺度、制御焦点尺度、説得的メッセージのフレーミング方略に関する調査を行った。養育スタイル尺度とフレーミング方略に関する調査については、幼少期に親はどうだったか、自分の親ならどちらのメッセージを採用するか、回想・想像して答えた。

(4) 新潟中央短期大学学生 28 名が、ポジティブ志向型玩具として、魚釣り、玉入れ、もぐらたたき、輪投げ、ネガティブ回避型玩具として、イライラパニック、バランスゲーム、玉転が

し迷路、だるま落としを行った。制御焦点の操作として、促進焦点群はおもちゃ課題の成績を加点法で提示し、予防焦点群は減点法で提示した。

4. 研究成果

(1) Sasaki & Hayashi (2015) が報告したように、予防焦点場面ではネガティブ表現が使われ、促進焦点場面ではポジティブ表現が使われるという制御適合の関係性が、実際の保育中の保育士の言葉がけにも確認できた(表1)。また、経験年数に伴うフレーミング方略の変化や担当クラスの年齢によるフレーミング方略の差異は認められなかった。一方、保育学生という言葉がけは予防焦点的な内容に偏り、フレーミング方略はネガティブ表現が多かった。学生はその立場上トラブルや事故の防止に意識が向くため、言葉がけが予防焦点に偏るのも当然である。これに対して、保育士による子どもの成長を見据えた促進焦点的な言葉がけは、即応的即時的な効果を期待する予防焦点的な言葉がけと異なり、保育者として勤務経験を重ねる中で培われる専門性であることを示唆している。

表1 学生と保育者の言葉がけの比較

	予防焦点		促進焦点	
	ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
学生	3(0.01)	217(0.84)	16(0.06)	21(0.08)
保育者	21(0.10)	123(0.56)	55(0.25)	19(0.09)

* 括弧内は比率

制御焦点以外の分類について(表2) いずれの保育士も指示的な言葉がけが大半を占めるという結果は先行研究と一致する。全体的に見ると、指示、確認、勧誘、提案の順で頻度が高い。この順で子どもへの統制力は強く、したがって逆に提案、勧誘、確認、指示の順で子どもの主体性を期待する度合いが高いと考えられる。促進焦点・予防焦点場面に関する言葉がけの方略については、予防焦点に比べると促進焦点の言葉がけは勧誘 ($p < .05$)、提案 ($p < .005$) の頻度が高く、促進焦点の言葉がけにおける子どもの主体性を育む側面を反映していると言える。

表2 促進・予防焦点状況の言葉がけ方略

	指示	確認	勧誘	提案	許可	代弁	ポジ	ネガ	合計
促進	80	22	30	13	3	1	16	1	166
予防	124	19	26	3	2	2	0	58	234
全体	1519	298	291	65	49	13	45	92	2372

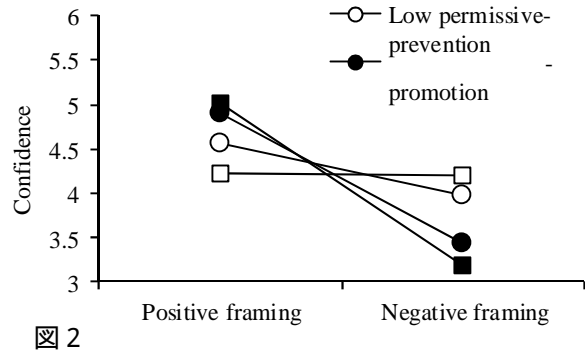
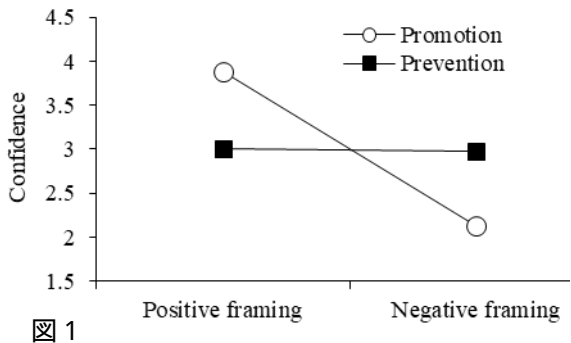
Do 状況・Don't 状況に該当する言葉がけに関して、Do 状況に比べて Don't 状況の言葉がけが多いのは、自己主張に対して自己抑制が遅れて発達する幼児期の自己制御の性質を反映していると考えられる。言葉がけの方略については、Don't 状況に比べると Do 状況の言葉がけは勧誘 ($p < .001$) の頻度が高く、子どもがしたがらない行動を促す際の保育士の言葉がけの工夫が伺えよう。

表2 Do・Don't 状況の言葉がけ方略

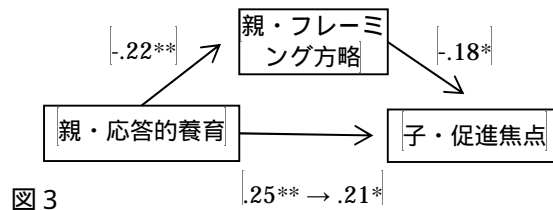
	指示	確認	勧誘	提案	許可	代弁	ポジ	ネガ	合計
Do	48	6	22	0	0	1	0	3	80
Don't	103	12	10	0	0	6	0	13	144
全体	1519	298	291	65	49	13	45	92	2372

(2) 子育てに関するメッセージへの保護者の信用と賛同について、3つのメッセージの平均値を従属変数とする重回帰分析を実施した。分析の結果、制御焦点×フレーミングの効果はメッセージへの信用において有意であった。促進焦点メッセージにおいてのみ、ポジティブフレーミングが有効という制御適合に合致したフレーミング効果が見られた(図1)。一方、3要因交互作用効果は、許容的養育スタイルにおいてのみ両方の従属変数で有意な効果が見出され、許容的養育スタイルの高低によって制御焦点×フレーミングの交互作用の有様が変化すること

が明らかとなった(図2)。すなわち許容的でない親ほど、制御焦点メッセージではポジティブフレーミングが有効であった。



(3) 子どもの自己制御に対する親の養育とメッセージ方略の影響については、親の養育スタイルがフレーミング方略の選好を媒介して、子どもの制御焦点傾向に与える効果が分析された。分析の結果、応答的養育スタイルと促進焦点傾向の関連がフレーミング選択の選好によって媒介される傾向が示された (Sobel'Z=1.71, $p=.09$)。一方、統制的養育スタイルと子供の予防焦点傾向の関係に対する予防焦点メッセージの媒介効果は認められなかった (Sobel'Z = -0.73, $p>.1$)。子どもの制御焦点傾向に対する親の言葉がけのフレーミング効果を見出した本研究結果は、Sasaki & Hayashi (2015)によるメッセージの送り手(親)の視点からの知見を、メッセージの受け手(子ども)側から支持するものとなった。



(4) おもちゃ課題の各得点について、促進焦点群・予防焦点群間で t 検定を行ったところ、いずれの測定値においても有意な差は見出されなかった。したがって、おもちゃ課題においては、加点・減点の制御焦点操作による制御適合は生じなかった。おもちゃ課題の各得点を説明変数として主成分分析を行い、おもちゃ課題がどのようにカテゴリー化できるか検討した。主成分分析には十分なサンプルサイズではないが、制御焦点機能を捉える課題の開発の糸口となることが期待された。主成分分析の結果、第一主成分において負荷量の高いおもちゃは、加点型で臨機応変な動きが求められるゲームであった。第二主成分において負荷量の高いおもちゃは、ミスをしないうに一定の動きを反復するゲームであった。これらの結果から、促進焦点機能を測定する課題として加点型で臨機応変な動きを伴う知覚運動課題、予防焦点機能を測定する課題としてはミスをしないうに一定の動きを行う知覚運動課題が提案された。

表3 おもちゃ課題の主成分分析結果

測定値	第一主成分	第二主成分
イライラ	-.848	-.093
魚釣り	.797	-.134
もぐら叩き	.690	-.083
玉転がし迷路	-.567	.471
バランス	.034	.765
だるま落とし	.057	.640
玉入れ	.462	.628
固有値	2.37	1.65
寄与率	33.84	23.51

< 引用文献 >

Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.

Sasaki, H., & Hayashi, Y. (2015). Regulatory fit in framing strategy of parental persuasive messages to young children. *Journal of Applied Social Psychology, 45*, 253-262.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

佐々木・林 (2017). 多母集団同時分析による回顧的ペアレンティング尺度の信頼性と妥当性の検討 慶應経営論集, 34, 233-246.

Sasaki, H., & Hayashi, Y. (2016). Inexperienced versus experienced mothers' and preschool teachers' strategies for providing persuasive messages to young children. In D. Arnold (ed), *Preschool Children: Social Skills, Educational Development and Health Disparities* (Pp. 69-82), NOVA Publishers.

〔学会発表〕(計8件)

佐々木・林 (2018). 子育てに関するメッセージフレーミングと制御適合 養育スタイルの調整効果に注目して 日本心理学会

佐々木・林 (2018). 親の養育スタイルが自己制御志向の発達に与える影響 説得的メッセージにおけるフレーミング選択の役割 日本教育心理学会

佐々木・林 (2018). おもちゃ遊びにおける制御焦点 おもちゃ遊びのパフォーマンスと自己制御 東北心理学会

佐々木・栗原 (2017). 子どもの自己制御行動を促す保育者の言葉がけ方略 保育場面の発話分析から 日本心理学会

佐々木・栗原 (2017). 子どもの行動を引き出す保育士の言葉がけ方略 保育場面の発話分析から 日本教育心理学会

佐々木・栗原 (2016). 保育士の言葉がけに見られるフレーミング方略 保育場面の談話分析から 日本教育心理学会

佐々木・久保田 (2016). 幼児の自己制御行動を促す説得的メッセージ 保育者と保育学生の発話の比較 東北心理学会

佐々木・栗原 (2016). 子どもの自己制御行動に関する保育学生の言葉がけについて フレーミング方略の観点から 保育士養成協議会研究大会

〔その他〕

ホームページ等

https://www.nuis.ac.jp/pub/teacher_sasaki_h.html

6 . 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：林洋一郎 栗原ひとみ

ローマ字氏名：HAYASHI, Yoichiro KURIHARA, Hitomi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。